

学生参画による大学の 授業開発と私

「参画」は、まなび・しごと・あそび
・くらしをつなぐキーワード

林 義 樹

(埼玉県／武蔵大学)

はじめに

『移動大学』の第1回黒姫セッションに参加したのは、1969年（昭和44年）私が23歳になる夏のことだった。そこで私は、川喜田二郎先生とKJ法に出会った。そして「参画」ということばにも、この時出会っている。その冬のクリスマスに、先生と大阪の玉出小学校にKJ法を教えに行ったことを昨日の事のように思い出す。日本での最初に小学校に、KJ法が導入された日であった。その後の数年間を、私はKJ法と移動大学の研究・開発・普及に没頭した。

大学の教壇に立ったのは、九州の南端、国分の九州学院大学（現、第一工業大学）の教職課程であった。その時以来、学生を授業に積極的・主体的に参加させるにはどうすればよいかの教育実践に取り組んできている。もう20年になる。

『参画授業』と呼ぶ一定の方式を完成させたのは、私の郷里、福岡市の中村学園時代のことであ

る。私は、「学生参画型の授業開発」と呼ぶ独特の方法で、学部生と共同でこのシステムを開発した。学生は代わりレーしながら、この授業開発を支えてくれた。彼らの力なしに、この研究開発はあり得なかつただろう。大学も延べ1500万円も気長に支援し続けてくれた。

武蔵大学で6年の歳月が過ぎた。この間、私はこの参画授業の方式の一般理論化と参画技術の理論的体言化に力を注いできた。『学生参画授業論——人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法』（1994年、学文社）という本で、『参画理論』とネーミングして発表した。大学の授業開発から開発したこの理論と技術は、教育界では、大学人だけでなく、生涯学習とりわけ「まちづくり」の手法として関心を持たれた。意外なことに、医療たとえば、精神科看護やインフォームドコンセントの研究者から反応があった。「患者参画」というコンセプトの論文が大学院で書かれ雑誌に掲載された。その他老人クラブや生協に共感者を得た。昨年から、大学生協連との関係が密になって来ている。なんと、幼稚園児や小学校の児童にも参画活動は大受けのようである。

参画理論のポイント

参画という言葉は、最近では「男女共同参画社会」という用語の中で、よく見かけるようになった。そこで言う「参画」とは、辞書的な一般語法の「計画に参加する」という意味で使われている。しかし、私は、この参画という言葉に、参加の到達点として、大きな願いを込めて用いている。

参画理論は、①参加の3段階理論、②学びの3類型論、③参画技術論、④参画型思考論の4つのサブ理論で構成されている。本稿では主として①②のポイントだけを紹介したい。

表1 参加の3段階（参加者のかかわり方の変化に注目して）

段 階	コンセプト	キーワード	行動のレベル	参加の局面	理解の程度	参加の姿勢	情報の流れ	知のあり方
第1段階	参集 Attndance	いあわす	個人的	局所状況	断片的	受動的	一方向	知識
第2段階	参与 Collaboration	かかわる	集团的	小状況	部分的	能動的	双方向	認識
第3段階	参画 Commitment	にないあう	組織的	全体状況	包括的	創造的	多方向	意識

表1で示したように、参加を参集・参与・参画の3つの段階に区分すると大変便利である。我々日常の経験から、参加の姿勢や態度に、その主体性や関わり方の度合いに差があることを知っている。私は、学生の授業への参加の観察と仮説検証のための実践から、改良に改良を加えて表1にまとめた。

ポイントは、参集から参与と、参与と参画の間の段差である。そこには、飛躍を必要とするはつきりした段差を認めることができる。第1のそれ

は、個人の壁を破って他者と関わることである。

大切なのは、第2の飛躍であるが、それは、参加している場の「場づくり」、そのものにかかわるという飛躍である。おもしろいのは、各段階で使われている「知の質」にも、どうやら格差がありそうだということがわかりはじめている点である。詳しくは述べないが、場づくりそのものにかかわるといことは、その場の成立の前提条件の吟味に加わることであり、「知の知」のようなメタ次元への知の扉を開くことになる点である。

表2 参加の型による教育の3類型

		参集型教育	参与型教育	参画型教育
学習者	役割	視聴者	出演者	設営者
	行動	出席・視聴・記録	発信・交流・生産	企画・実行・伝承
	獲得	知識	認識	意識
先生	役割	レクチャラー	コーディネーター	スーパーバイザー
	行動	教える	調整する	学び合う
	決定	独断	相談	協議

次に、この参加の3段階の区別を用いると、例えば、教育をすっきりと3つの類型に分類することができる。表2がそれである。これまでの日本の教育は、参集型が主流であったが、最近やっと参与型に移行しようとしている。一般に、「参加型の教育」と呼ばれている形態のほとんどは、この参与型を目指していることがわかる。

大切な点は、この参与型も、しょせんは先生の手のひらの中の活動にすぎないという点である。だから、今の参加型教育ばかりを押し進めると、先生は無限にめんどろで多忙になり、なによりも学習者は、口は達者だが無限に受け身になり、自分が受け身だということさえ気づかなくなると予想される。来るべき生涯学習社会に於いては、学習者自らが学ぶ場を創造していくという参画型の学びに向かって、参画型教育が準備されなければならない。

さらに重要な点は、先にも述べたように、そこで飛び交う「知の質」が次的に異なる点である。私の実践では、参画型に踏み込むと、知の質が認識を越えて意識、それも自己の行動の変革という深さにまでとどくようである。

おわりに

「まなび」の世界における、場づくりそのものに参加するという参画のコンセプトは、「しごと」の世界にも、かなりあてはまりそうである。しかも、協同という概念とかなり重なる部分が多いと感じている。実は、幼児の「あそび」の世界にもこの参集・参与・参画の段階が認められることもわかってきた。きっと衣食住の「くらし」の世界にもあてはまりそうである。

私の参画授業(97年度は、火、水、木)は、クラスワークと呼ばれて常にオープンにしてある。ぶらりとのぞいて、コメントしていただくと学生は大喜びである。また参画文化研究会や、学生協連のバックアップで「学びと交流」という研究会もある。ここでは、参画活動のための具体的手法のワークショップを開いている。林研究室はオープンマインドを合言葉にしている。気軽にアクセスしていただければ幸いである。

武蔵大学・人文学部・林研究室

〒176 東京都練馬区豊玉上1-26-1

TEL.03-5984-3838

FAX.03-3991-1198